

## 「第7回 国際性差医学会に参加してのご報告」

東京女子医科大学東医療センター 性差医療部 片井 みゆき

2015年9月20-23日に開催された第7回国際性差医学会に参加して参りましたのでご報告させていただきます。今回は会期が日本心臓病学会と重なり、当学会の下川宏明理事長、性差医療情報ネットワーク (NAHW) 理事長天野恵子先生など主要な循環器分野の先生方のご参加が叶いませんでした。下川理事長の名代として片井が参加させて頂くこととなり、重責に緊張しての参加でしたが、Board 会議への出席など身にあまる貴重な経験をさせて頂きました。

2006年の第1回国際性差医学会もベルリンで、今回は同地で3回目の開催となりました。会期前半の9/20-21が The 7th Congress of the International Society of Gender Medicine (IGM)、後半の22-23日が The International Congress of Gender Medicine of GIM (Institute of Gender in Medicine at Charite) で、2つの国際会議の共同開催という形でした。性差医学研究を国際的にリードしているシャリテ性差医学研究所 Institute of Gender in Medicine at Charite (<http://gender.charite.de/>)の Vera Regitz-Zagrosek 教授が主催され、フンボルト大学のウィルヒョウ会館 (Virchow Haus) が会場となりました。森鷗外が舞姫を書いた下宿に程近い場所で、第1回国際性差医学会で訪れた頃は東ドイツの重厚な面影がまだ残り、街中あちらこちらが工事中でした。今では周辺もおしゃれなカフェやお店などが立ち並ぶ明るい雰囲気へと変わり、10年間の月日の流れを感じました。

会期前半の IGM は性差医学研究者が世界各国から集まり、それぞれの専門分野のプレゼンテーションを行いました。また、会期後半の GIM はサブテーマが“**Young meets Experts**”でしたが、言葉通り年若い研究者や大学院生達がヨーロッパ各地から参集し、会場に若い熱気が溢れました。ヨーロッパでは性差医学の医学教育への導入も進んでいます。若い世代が性差医学に関する基礎医学研究を積極的に行い、多数の発表をしているのが印象的でした。また、特記すべきこととして、循環器分野の口演では日本発のデータが多数、繰り返し引用・紹介されていました。日本循環器学会では、日本性差医学医療学会に所属される先生方が中心となり「循環器領域における性差医療に関するガイドライン」を提唱されましたが、改めて日本の循環器分野のレベルの高さを再認識する思いでした。

今回、日本からの参加者は東京医科歯科大難治疾患研究所の黒川洵子先生、東京女子医科大学学生健康センターの横田仁子先生と私の3人でしたが、国際結婚されスウェーデン在住の竹尾愛理先生も参加されていて、日本人は計4人となりました。今回のアクティビティとしては黒川先生と片井がオーラルプレゼンテーション、横田先生と竹尾先生がポスター発表、片井が座長2回、総会には日本を代表し4人で投票しました。国際性差医学会の特長のひとつは、アットホームな雰囲気です。世界の一流研究者と face to face で親しくお話しができる点です。国や世代、専門分野を超え、性差という視点から、親しく活発な会話やディスカッションが出来て、とても楽しく実り多い時間を共有できました。

また、今回の総会決定事項として特記すべきことは、下川理事長の Board Member への昇格が満場一致で承認されたことです。Board Member のうち発足当初からのメンバー5人は2年後に退任されることが Board 会議で決まりましたので、今後の国際性差医学会は下川理事長らがリードしていくことになると思います。私達日本の学会員もそれを念頭に置き、国際性差医学会に向けた研究や発表を、今後さらに活性化していくことが望まれます。

次回の国際性差医学会は2年後に開催される予定（開催地や日時は現在検討中）です。次回は多くの方々にご参加頂き、様々な分野で日本のプレゼンスを示せることを祈念して、報告を終えさせていただきます。